

草枕の 我にこぼれよ 夏の星

沖縄県宮古島

宮古島へ

梅雨空の羽田から飛び立った飛行機は、奄美大島を過ぎたあたりで明転した。飛行機が進むにしたがい、空と海は南の色彩を濃くして、否が応でも陽気を誘われる。

目的地に近づいて飛行機が高度を下げると、海洋を遊泳するエイの形に似た扁平な島があらわれた。エイには、長く伸びた鞭状の尾があるが、この島の北西部も細長く尾が伸びていて、まるでチョウチンアンコウの突起物のように、柄の先にひよこつと引っ付いた島が見えた。

そうかあれが池間島で、細い柄に見えるのが池間大橋かと思った。位置からすると、真下に与那浜崎の現場があるはずだと思ひ窓から下を覗いたが、陸地面がどんどん過ぎ去って、間もなく宮古島空港に滑り込んだ。

同乗客のほとんどは観光客で、空港に降りたらホテルや民宿からの出迎えの車に乗り込んで行った。ぼくはレンタカーを予約してあった。何組かの観光客と一緒にマイクロバスで事務所に向かい、そこでレンタカーを借りた。レンタカーのハンドルの金属部分に触れたらヤケドするほど熱かった。直射日光の強さは想像以上のものが

あってキラキラと眩しい。急いでサングラスを着用した。

着陸してすぐに、一週間前から現場に入っている大江忍（ナチュラルパートナーズ代表）さんから携帯電話が入っていて、宿所となる民宿で合流し、宮古そばをご一緒することになっていた。久しぶりにお会いした大江さんは、赤銅色に日焼けしていて、無精ひげが目立った。

「日照りが強くて、その疲れからか夜もよく眠れなくて。でもようやくのこと、建て方を終えました」

この一週間は、快晴に恵まれたという。快晴続きということは、めくるめく太陽相手の作業続きだったことを意味してもいい。大江さんと一緒にやってきた大工たちも、かなりバテ気味だった。けれども、一段落したという安堵感があって、今夜は建て方を祝う会が予定されていた。午後からは、大工たちに代って左官屋が宮古島入りし、荒壁の竹小舞を編むという。ぼくはこの建築のハイライトというべき時期に宮古島にやってきたのだ。

ここまで来るのに十年間。

愛知を拠点にして設計や建築の仕事をし

ている大江さんが、何故に宮古島で建築されているかについては、当然に理由がある。千葉県に住んでいた、重症の化学物質過敏症に罹った二人の姉妹を抱える家族4人のための家を建てるためであった。

この一家は、本州から移住されてから十年、その間、ずっと大江さんは伴走者を務め、ようやく建築へと漕ぎ付かれたのだった。選ばれた土地は、宮古島北海岸の崖の上。すばらしい景観の、空気のきれいな土地である。この土地を選ぶまで、一家は土地台帳と公図を調べあげ、交渉を重ねて購入し、次には建築許可を得るために、行政との四苦八苦のやり取りに時間を費やされた。宮古島に移住されたとき、二人の姉妹は五歳と二歳だった。それから十年の歳月は、一家にとって余りに長いものだったが、ようやくハレの上棟の日を迎えられたのである。

しかし空気のきれいな場所は、台風が来襲すると凄まじい風（3年前の台風では、宮古島で千本の電柱がなぎ倒された）が吹く場所でもあって、ここに伝統構法で家を建てるというのは、破天荒なことである。そこに建築主を導いた大江さんにとっては、それは重責以外の何ものでもなく、よくぞ引き受けられたというのが、ぼくの最初の感想であった。何でそこまで、と大江さんにお聞きしたら、大江さんは「愛」だと言われた。こういう言葉を口にし、実践している人を、ぼくは初めて真近にみた。アフガンで井戸を掘り続ける中村哲さんのような人だと思った。

この家は、第一にシェルターとして機能しなければならない。もし台風が直撃したとして、それに家が耐え抜き、家族が守られなければならない。家を造るとは、のっぴきならないことであり、自然との格闘そのものであることを改めて思った。

宮古島に吹く風

宮古そばを食べた後、大江さんと一緒に現場に向かった。建て方は完了していた。すでに野地板が葺かれ、屋内に海からの爽やかな風が通っていた。強い日射に建物は晒されているが、日影にいると意外と涼しい。

「名古屋より、はるかに過ごしいい」

と大工たちはいう。粘りつくように暑い名古屋の夏に比べれば別天地というのである。宮古島には山はなく、扁平な島は海に浮んでいるようで、太陽熱は巨大な熱容量を持つ海に吸収されて、島を吹き通る風が涼をもたらしてくれる。事実、民宿の夜は冷房なしでも快適だった。

しかしこの風は、ひとたび台風がやってくると凶暴な牙を剥き出して襲い掛かってくる。

日本が保持している世界の気象記録は、上越地方の積雪深と宮古島の風速であるが、有史以来の猛風とされる第二宮古島台風（国際名は CORA）の最大瞬間風速は、85.3m/s。進行速度が毎時十 km 前後と遅く、三十時間もの長時間にわたり宮古島に居座ったと記録される。この台風については公式の気象記録のほかに、『恐怖の三十八時間』という記録集が発行されている。入手して読んだら、風による暴力の凄まじい体験がこれでもかと綴られていた。宮古島が、石垣島や沖縄本島よりも強風に晒されるのは、島の中央に山岳を持つ石垣島や西表島、また棒状に長い沖縄本島などの地形の違いが大きいといわれるが、それでも宮古島の大きな集落は、主として西側に置かれており、台風被害を可能な限り避けるよう配置されている。

今回、建築用地とされた東側の海岸線に建っている家は、台風の直撃を受ける土地である。東平安名崎から西平安名崎までの

海岸線をレンタカーで走ってみたが、風防を期待できる場所を除いては皆無であった。それは時計を逆廻りして、東側から猛烈にやってくる台風を避けるためであって、そこはたしかに空気のきれいな場所であるには違いないが、もし第二宮古島台風のような風に見舞われたら、果たして伝統構方の家が持ち堪えるだろうか心配された。

宮古島に「アララガマ魂」という言葉がある。苦難に打ち克つ精神をいう。空気のきれいなこの土地をどうしても選ばざるを得なかった家族と、猛風に耐える家を建築することを請け負った大江さんたちは、この「アララガマ魂」そのもののようには思えた。

赤土による防風堤

寄棟に赤瓦の建築は、沖縄独得の景観をつくっている。垂木の上に竹を編んで敷き、泥がためして雌瓦を固定し、その間に雄瓦を被せ、瓦と瓦の間を漆喰で塗り固める屋根は、台風に対応した沖縄の伝統的手法である。

ぼくは車で島中を走り回り、赤瓦屋根の家を探して回った。久松、保良、来間島などの古い集落を訪ねると結構残っていた。今を盛りと咲く真赤なブーゲンビリアの花と相俟って、それは美しい光景を醸していた。

ただ朽ちてしまった家が多く、廃屋になった建物も少なくなかった。ガジュマルの樹が立つ廃屋は、樹の蔓が容赦なく建物に絡み付いて凄惨な印象を受けた。それはこの島に降り注ぐ熱射の厳しさをあらわしていた。

最近の建物で赤瓦を葺いた家は、わずかにコンクリート建築に見られたが、木造のものはない。

そういうなかで大江さんは、赤瓦は三州瓦を用い、木は三河の杉材を、竹小舞の竹や縄についても遠く愛知県から運び込み、宮古島において伝統構法を用いて建てようというのである。建築主と、それを支える地元の人たちの熱烈な協力を得て建て方まで来たのだが、悩みは土壁の素材だった。遠くから土を運ぶ困難さもあったが、ここは地元の土を用いるというのが、大江さんの流儀だった。

そこで敷地内の赤土を用いることになったのだが、もし土が化学肥料などで汚染されていたら、入居者の事情からして使えない。慎重に検討を重ねた結果、身体への影響が認められない土であることが分かった。

この赤土は、壁土だけでなく、海岸に向けて盛られた土堤にも用いられている。与那浜岬から吹き上がる風をこの土堤にぶつけて上昇させ、瓦屋根の上に行くことが期待されている。流体力学の応用である。現在、東京大学の神田順教授の方で、正確を期すべく解析中である。

大江さんが探し出してきた文献『宮古島旧史』によれば、宮古島にあつてこの赤土は、「五穀豊熟して食物多し」と記されていた。

洗骨葬の無類の優しさ

宮古島を車で走っていて目に飛び込むのは、大きなお墓である。お墓がある場所は、たいがい景色のいい場所が選ばれていて、ここのお墓は何だか晴ればれしい。

宮古島に「ホトケのお正月」という年中行事がある。旧暦の一月十六日に、親戚が一堂にお墓に寄り合い、先祖をもてなす盛大な宴である。亡くなってあの世に行った死者たちも、生者と一緒になって楽しく正月を過ごすというもので、京都六波羅蜜寺の地獄絵をみて育ったぼくには想像外の世

界である。

宮古島の人たちが、いかなる理由を以ってこれほどに死者を尊ぶのか、ぼくは無性にそれが知りたくなり、それで宮古島平良にある二つの公立図書館に通った。

本を漁っていたら、宮古島の大きなお墓は、洗骨葬の名残りだという記述がみられた。洗骨葬とは、亡くなった人を土葬で葬り、数年後（三年後と、四、五年後という説があった）に掘り返し、死者のお骨を海できれいに洗って骨だけ壺に入れて、改めて新しい墓に埋葬する葬法をいう。何とも凄まじい葬法である。もともと、鳥葬や風葬も想像を逞しくすると凄まじいものではあるが……。

洗骨葬は、かつては宮古島周辺だけでなく、中国の広州、福建、海南島、ベトナム中南部あたりの海沿い一帯で見られたと書いてあって、ある本には、掘り起こした骨は、白骨ではなく黒骨だという記述があった。土葬の骨は、土壌や土質の影響で黒っぽくなるというのである。この黒骨を洗うのは女性の役割とされた。

この島の女性たちの忍従の歴史は、ここに極まると思った。同時に、無類の優しさというか、死者に対するよほどの思慕の情がなければ成り立つものではないと思った。それはこの島の人たちの、先祖崇拜のつよさをあらわして余りあるのではなかろうか。

高樹のぶ子が宮古上布の織子を主人公に書いた小説『サザンスコール』（日本経済新聞社刊）によれば、洗骨葬は今でも離島の大神島などで行われているというが、宮古島本島では火葬に変わっていて、今では見られない。

建て方を祝うオトーリ

オトーリは、宮古島独得の度肝を抜く泡盛の回し飲みをいう。まず親が口上を述べ、

隣の者に自分が飲み使用したのと同じ杯に酒を注ぎ、注がれたものはその杯を飲み干す。そして参加者に順々に酒を飲ませて一巡したら、隣の者（新しい親）が立ち上がって、また口上を述べという具合に、車座の者全員が終わるまでエンドレスに続く。

泡盛は庶民には貴重品で、量の少ない泡盛を酒宴の参加者に均等に分けるために行われたことが起源とされるが、居酒屋等で行われるようになり全国に知れ渡った。

このオトーリには笑い話があって、これを悪習と考えた宮古島の議員たちは「オトーリ禁止令をつくろう」と議論しながら、その実オトーリをやっていたというエピソードが伝えられている。

この家の建て方を祝う会も、オトーリに従って執り行われた。場所は、敷地の隣にある公園だった。ぼくは下戸なので、オトーリの車座から逃れていた。大江さんや愛知の職人衆は進んで、このオトーリに加わり祝杯を傾けていた。大工衆からは、この一週間の苦行からの解放感が、建築主のご主人からは「やった！」という喜びが、この一家を受け入れた地域の人達からも歓声が聞かれた。

宮古島に移住したとき、二人の姉妹は幼時だったが、それぞれ十七歳と十五歳の娘さんに成長していて、ぼくはこの祝う会で初めて出会った。明るくて陽気な姉妹だった。そんな姉妹を育てられ、建て方まで頑として運ばれたお母さんもご一緒だった。オトーリは煙草を吹かす人がいるので、その紫煙を逃れた場所で、お母さんや姉妹とあれこれ話し合う機会が得られた。大江さんも、ときどきオトーリから離れてそこに加わってくれた。

建築用地は、農業をやることを前提に許可されており、家族でグバア茶を栽培することを考えているという。この家族にとって、この土地と建物は険しい場所ではある

が、あらゆる意味で拠点である。生き続ける場としての住まいの本質的なものが、ぼくはここに在ると思った。

オトーリが開始された時には、真下に見える与那浜崎を夕陽が照らしていたが、いつの間にか、夜の帳が降りていた。公園横の水辺にホタルが舞い出した。

やがて夏の星が顔を見せた。空気が澄んでいるので、星は明るかった。大きな十字の星の並びが星座をつくっていることが分かった。はくちょうの形をしていることが分かった。こと座のベガがいて、対岸のわ

し座ではアルタイルが輝いている。南に目を転じると、Sの字の形に星が並ぶさそり座があつて、その心臓部にアンタレスが輝いている。

ぼくは公園の芝生に寝転んで夜空をみあげた。子規の「草枕の我にこぼれよ夏の星」という句を思い出した。床に臥せる前の子規が横溢している句である。オトーリの歓声を聞きながら、ぼくはいつの間にか、その芝生で眠りについていた。